植木林之助編輯

俳優評判記

明治十二年
第十一月巡言

特57
537

特57
537

新富座俳優評判記六編序

鏡山いざ立寄て見てもらむと年經ぬる身も若人も木々の紅葉の眺望を競ひし新富座の這般の脚色ハ故郷の錦の故さを温ね新狂言の目枯せず書おろしたる河竹の氷莖ハ築摩川よ跡を止め梅鉢の紋世よ薫りて後よ傳ふるものならしされば其祇の六二の大人等が文好む株木心より立舞ふ俳優の伎倆彼是を品定めしつ倒の黒表紙よ綴られしかど其説投書の衆議よ依り決して一二の意よ傾ゝき彼何某先生が演劇を評する如く實際のみよ比較して衣裝髪道具立の虚飾形容あると慮はゝ偏へよ歌舞伎の正本を國家の歴史よ對する如き琴柱よ膠の僻説ならゝ演劇ハ油絵なり實地と雖も彩色用ひざるを得ゝ接近て觀よ興なく隔て眺むるよ巧みあり此事既よ歌舞伎新報の客物語よも論らひしが其文切斷て全からぬハ遺憾といふも餘りありと

序なゞらの橋柱愚痴もいはぎい殿れまし と折々筆を閲けど持ッたゞ病痾の劇場癖又六編の序ゟ出まするゝ客者評判記の古話恣漏遺ひかなよみ社よりいろは新聞へ空乗の老猫の妖怪

新富町の劇場河岸ゟ　假名垣魯文漫誌

○

該評判記も當狂言にて千秋樂と成升て五座り升來辰春狂言の評判記にゝ惣坐中の位付と仮覽に入升事故江湖見功者仮運中右位付品定と投書有ん事と願升

撰者　富田砂莚
　　高須高燕
　　梅茶玄魚
補助　六二總連中

○第五号　源平布引瀧　正誤

二丁表十四行「投書家諸の」ゝ「諸君」四丁裏五行「まんまと甘く」ゝ「まんまと手に入」

七丁裏十八行「云處にて」ゝ冗字「浮ット下より上を見」

同行「云時」も冗字「沈ット下を見おろす」

十丁裏十三行「手拵させ」ゝ「手拵をさせ」

十一丁裏十六行「ゝ氷の上で」ゝ「が氷の上で」

十七丁表三行「首長」ゝ「酋長」

同裏四行も同断

同十四行「電報持て」ゝ「電報を持て」

同十九行「首長」ゝ「酋長」

同廿行「居る合衆國」ゝ「居るゝ合衆國」

十八丁表四幕目役割「市川昇三」ゝ「中村昇三」

同裏五行「其ゞ」ゝ「是が」

廿四丁表十七行「商手」ゝ「高手」

廿五丁表十二行「プランセーズ」ゝ「フランセーズ」

同十六行「フラスクリン」ゝ「フランクリン」

○まだ誤字等ゝ軒並で有升ごゞ用捨を願ひ升

○例の通り○ゝ社中の評言△□×の印ゝ投書の評言ト五らん下さり升う

○當狂言名代

抑々當狂言の發端ハ貞和年間足利の世ハ泰平ヨ式日を覩ふ上巳の雛祭り飾る膳部ヨ毒ありて野田と唐津ゞ非業の最期是を見出せし功ヨより立身なせし大月へ殿の上意の繰組も蒲井ゞ心濟ざると察してお波曾平次が不義を名としてあの世の旅立散り行花の春すぎて卯の花曇り胸はれぬお才が忍ぶ長局浮名を流す鳴川堤で伯父大六と殺したる悪事も兀し古位牌天の投網ヨ左源太を目がけて打し妾宅ゞ手裏劍後の證訟ヨ鳴る鉦の法會の席ヨ玉笹を盗みの科で政尾ゞ折檻遯命茲ヨ筑摩川深き巧みヨ又助ゞ忠義と惜むなぶり切り泪の時雨朱ヨ染む紅葉ヨ大炊ゞ瓢酒足もよろめく猩々の謠とし るべヨ突掛る鎗を切られて鄉右衛門我身の鋪ヨ嚴敷拷問吉良中澤ゞ白狀ヨ確証と得し佐渡守戸田ゞ助言の裁判ヨ悔悟なしたる藏人ゞ憂を三上の笠牢ヨ万助お ひなゞ情ヨて切腹なせし勘慈の詰局

干時近江名所温

鏡山錦梔葉

九幕

浄瑠璃

天神の寶前ヨ梅鉢の幕張

中宵宮五人俠客

第二番目大切ヨ惣座中罷出相勤ヤル

清元清海太夫　清元美家太夫　三弦　清元梅吉
清元延壽太夫　清元三家壽太夫　清元家壽三　清元延太郎　上調子　清元愛造
清元越路太夫　清元壽津太夫　清元美喜太夫　三弦　清元德壽郎

第一　多賀の明神ヨ武運の祈念　才智ハ響く
大領の御殿ヨ奸臣の出世　三井の晩鐘

第二　浦井の邸宅ヨ押附の結納　比翼と契る
別室の離屋ヨ來世の婚禮　堅田の落鴈

第三　政尾の部屋ヨ雨夜の密會　戀情ヨ濡る
奥殿の庭前ヨ忍術の曲者　辛崎の夜雨

第四　大月の新邸ヨ百姓の異見　天罰ハ速さ
鳴川の閑討ヨ投網の得物　矢走の歸帆

第五　大院の法會ヨ白波の濡衣　危難と掃ふ
筑摩の大河ヨ水馬の乘切　栗津の晴嵐

第六　山路の楓下ヨ謠曲の一聲　悪事ハ積る
藏人の別荘ヨ貞婦の自殺　比良の暮雪

第七　大家の役所よ逆徒の詮議　黒白と照す　石山の秋月
第八　三上の山上よ重罪の笠牢　灯提よ輝く　瀬田の夕照
湯嶋の天神よ初冬の祭禮
地走の演曲よ五人の客俠

○序幕役割

○　中村宗十郎
浦井主膳
○　市川國右衛門
中澤甚平　尾上梅五郎
膳番　野田永太郎　大谷門藏
配膳役　民谷宗七郎　市川猿十郎
料理方　根島新八　小川幸升
同　宮原拗藏　坂東竹二郎
近習　市川寶作
同　尾上尾登五郎
同　中村政壽郎
同　市川小半次
茶道　墨才　尾上風扇
同　鉞才　市川左い助
奥女中　中村島藏
同　中村碑蝶六
同　中村鶴次郎
同　大谷門兵衛
仕丁　坂東蕨助
同　尾上幸氷
同　中村鶴右衛門
社家　十内　中村昇三
神主　柿野鈴成　市川丹平
社家
○　尾上菊五郎
大月源藏后ニ藏人
○　澤村田次郎
多賀金次郎　中村鶴助
膳番　唐津四郎兵衛　坂東家久之助
奥女中　尾上音丸
小姓　市川幸作
多賀慶之助
小姓　中村珊瑚次
醫師　横田鎌齋　坂東寳知六
奥女中　繪合　中村駒三郎
同　若菜　澤村清十郎
竹川　尾上梅三郎
中老　玉笹　岩井小紫
吉良助太郎　中村鶴藏
○　市川國十郎
多賀大頭義信公
○江州白山社前の場
幕の内より仕丁四人(鶴太郎)(門兵衛)(蕨助)(幸氷)立かゝり居て今此所へは館の若様金次郎様慶之助様が参詣爲る夫に付ても慶之助様い正くは二男で在乍ら國元でお産なさ

れたもゐる上へお屈ぐの跡になり夫もへは三男と極り浮家來同様のお取扱との事何とお勞わしい事じやねへかト咄して居る鳥居の内ゟ神職一人社家二人出る仕丁四人ハ捨せりふ有て下手へ入る向う花道より中老玉笹若君金次郎様の手を引腰元(梅三郎)(清十郎)(駒三郎)付添出る跡ゟ若君慶之助吉良助太郎小性二人(珊瑚次)(音丸)奥女中四人(左ィ助)(碑碟六)(島藏)(家久之助)付て出る花道よてせりふ有て舞臺へ來り金次郎を上手に慶之助下手皆々居並ぶ是より金次郎慶之助の事を云明神へ參詣せんと金次郎に付て玉笹こし元三人神主社家華表の内へ入跡ゟ吉良ハ慶之助に向ひて正しくは二男で在なぐらは三男とお成なさるハ御殘念で御座り升うト氣を持せる様なせりふ有慶之助ハ耳にもうけず三男と成て家來分になるとも少しも親を怨む事ハないト云ているト神主出てお待兼もゐお星く御參詣ト云(吉良)イザ若殿様(慶)若殿とハ誰ことなるぞ我ハ家來の慶之助イザ神前へ參らん(吉良)是でお無ぐ七ッとハ前代未聞の「木の頭」若様とやナァと此道具まわる

○道具替つて多賀御殿の場

民谷宗七郎)近習四人(竹次郎)(政壽長)(實作)(尾登五長)茶道二人(小半次)(風扇)並び居て今日ハ上己之佳節にて

の外のお取込夫もゐ御配膳も遲なわりしト云ている所へ下手の襖より(唐津)(野田)兩人配膳へ帛紗を掛て持て出て民谷へ見分と乞う民谷ハ合役たる大月ハ御前へ召れてお側にお咄しを仕て居らるゝもゐ拙者一人にて見分せんト帛紗を取て一々改め何れも子細なしト是にて民谷「御膳を差上ん」ト云ところへ上手の襖の内にて「其御膳暫く待れよト」聲を掛て(大月)出て何れもが念に念と入られたる御膳もゐ疑ふ筈ハなけれども拙者も役目の義なれば一應見分せんト再び見分仕て汁椀の蓋と取一寸思入あり夫より皆檢めて茶道ゟ鎌齋を呼ト云是にて下手襖より(醫師鎌齋)出るト大月ハ鎌齋に立合ト云鎌齋汁と見て常ならぬ泡立なりト云是にて大月ハ膳番に御膳を更に調進する様ゟと云付るを野田聞咎めて只今唐津の見る前にて鬼役致し尚民谷氏見分されて子細なしト云れしを何もへ御膳を仕更ろト仰らるゝや但し此御膳に毒でも有と思召ノト民谷唐津野田三人にて大月に迫る大月左様にハなけれどお汁の内に必得ぬ所あるもゐ鎌齋に立合せし所常ならぬ泡立なりトナもゐ貴公輩を疑ふにハ非れど只上と大切ト存るもゐ新たに調へ差上るやうと申せしなりト是にて四人せり合に成ト、再び毒味をする事に成て民谷唐津野田の三人汁と吸ひ各々顔見合せて何れも腹中何

ともなしト是より大月に迫んとする時皆々腹の痛むこなしト、三人とも血と吐て苦しむ此時上手の襖より(浦井主膳)出て不斗ぬ珍事なりとて此場の様子を調べるト大月ハ在し子細を語る浦井ハ思入有て今毒に中りし三人ハ陰なき忠臣なるにとキット思入大月「此三人ハ毒に中りて詮穿する役に立ぬ早くお料理方を召取やう」ト云是にて下手より(中澤甚平)料理方二人(根島)(宮原)ヨ縄を掛て引立出る浦井ハ此事上へ言上せんト上手へ入大月ハ中澤に其者共ハ大切なる科人也へ禁獄致し置ト云ちよつと思入有て「ハテ何者の仕業なるの(中澤)「お家と覗ふ佞人共と」(大月)コレ「チョン」秘すべし〳〵ト此道具まわる

○道具替つて御殿の場

上段の真中に(多賀大領)うしろヨ小姓二人(珊瑚次)(左喜の助)下に(浦井主膳)居て配膳の椀中に毒ありて夫を試みし民谷野田唐津の三人ハ即座に吐血なして相果たりト云(大領)ジテ其毒氣有と云事ハ何者が見とめしト云(浦井)乃ち大月なりト云是ヨ中澤、吉良、近習四人鎌齋大月皆々出大月ハ殊ヨ賞賛せられて五百石加増の上藏人ト名乗るべしト恩賞ある大月ハ固く辭すを中澤吉良の両人にて是非御請をする様と進め終に是を受るト大領ハ浦井ヨ其方の娘ハ先頃小姓に上り居しが病氣の由にて下りたるが彼ハ如何致たト問(浦井)息才ヨて罷在よしを云(大領)まだ嫁さぬな(浦井)左様ヨは座り升ト是ヨて浦井の娘おなみを大月へ妻に遣せと云付られ浦井ハ止むを得ず承諾の旨を答へるト皆々祝すせりふ有(大領)予ヨ於ても一木の頭」喜ぶしいわい幕○宗十郎の浦井主膳ハ年齢と云 拵 万端申分なし門藏霍助梅五郎の三人が毒ヨ中りしを見て不審の思入ハシッカリと應ました○道具替り御殿ヨて大月ヨ加増を玉はる所何も仕ぜ苦々しいト云思入ヨて一言の口出もせず下を向て居る所キット大家の老臣と見得升た○夫より大領が其方の娘ハ如何致したと云時少し面を和らげる工合も十分なしト、婚姻を承知する所まで大出來〳〵

○囮右衛門の中澤甚平いつもながら氣座なしで大出來〳〵

○其外いづれもさしたる事なし皆々ようは座い升た

○菊五郎の大月源藏ハまとに此人ヨ打付のとまり役にて一寸見ても一曲有さうな工合十分なし○膳部と捻め汁椀の蓋を取ての思入○大諧詮議の場ヨて喜知六の鎌齋が白狀ヨお汁に毒氣ありトヤたい大月殿ご汁椀の蓋を取とき手品を遣つて毒を入しト云も成確ヨ汁椀の蓋ととる時毒を入たに違ひないが手品があまり手際の能すぎたもゑり何時そんな

事を仕たゝ見物よも知れなかつた○イヤ〳〵あの通り大勢の見張て居中でする事もゑ迂闊な手品でハ他が承知せまい

○霍藏の吉良助太郎先一通りよてよし○道具替りのキッカケのせりふどともなく應へのないハ扨爭れれぬ物○是でお年ごの七つとハト云と堂も側のら「チャとんでもねへ」とでも云たいやうで有升た○是でお年ごのお七つとハトでも云たら少しハ聞よく成かも知ぬて

○國十郎の多賀の大領ハ持まへの品格よて如何よも多賀様とハ見得升たゞ別に爰を見せるト云所のない役よて只さら〳〵と仕て居るもゑさして評する程の事なし

□膳部を改る時鼻紙とくわへるハ覆面の心持ゝ斯する位なら平生覆面を所持しさうな物

□風扇の茶道が鎌齋を呼出す時大月殿のお召トいとれしいかゝ御用で御座るトか云たし

○宗十郎病氣の節浦井の役此塲丈け坂東家橘代り勤る評由

○二幕目役割

浦井主膳　中村宗十郎
○
主膳娘おなみ　坂東家橘
浦井左源太　市川小團次
名嶋瀧右衛門　尾上尾登五郎
河村慶次　中村政壽郎
中間　中村鴨右衛門
同　市川黍藏
○
岩徒　曾平次　尾上菊五郎
○
岩徒　半藏　坂東家久之助
浦井の下女おたみ　市川三すじ
乳母おさゞ　岩井ゑげ松
吉良助太郎　中村霍藏
○
戸田大炊　市川國十郎

○浦井屋敷之塲

幕之内より(名取)(河村)立かゝり居(半藏)取次にて玄關に居る名取、河村ハ上巳之祝儀に來りしト云て居る所へ奥より(左源太)出て相授する是にて半藏奥へ入夫より主膳樣にいまだお下りハ御座らぬかト聞左源太まだ下らぬト云是にて兩人ハ今日御殿において大月ゞ藏人ト名を更め五百石加増ありしト云ことを語りて下手へ入る左源太ハ何もゑ父の下りが遲いかト案じる思入にて奥へ入向ふ花道より退出の体にて(浦井主膳)(曾平次)を供に連て來り花道にて(主)今日ハ思わぬ事にて退出ゞ遲くなりしト云事をいひ直よ舞臺

に來る奥より左源太おたみ出る主膳衣物を着かへる是を持ておたみ入是より左源太曾平次ゑ今日御殿にて配膳ゑ毒の有し事民谷野田唐津が毒ゑ中りし事大月ゞ重く用ひられて藏人に叙せられ五百石加增ありし事まで委しく語り夫よついて娘なみヲ大月へ嫁す樣との上意なりト云兩人驚きて此緣組を斷るやうト勸る此三人の咄しの内に下手より娘〔おなみ〕乳母〔おさご〕出て内へと入うトして此場の樣子が耳に入たる思入にて玄關に忍て立聞して居る左源太曾平次兩人ゑて此事を止め居る(主)沁よからぬ大月も爲我も左樣ゑ思へども上より直の仰もゑコリヤ娘をやらぎい成まいわいト外ゑて是を聞おなみおさご拔足にて下手へと入是より主膳ハ曾平次ゑ隣家へ行て娘を連て參れト云曾平次沁配の思入にて立兼て居ると(主)ヱ、行とヤよ(曾)ハイと下手へ入夫より主膳ハ奥へいて休息せんト起うトして左源太に「娘ゞの歸り來りても今の事ハ咄すまいぞト云て上手へ入左源太ハ跡ゑ殘り緣談の事と苦ゑし思案の所へ向ふ花道より〔吉良助宋郎〕中間二人に結納と載た釣臺を擔がせて出花道にて祝儀の事よつきたるおかしみの臺詞ありて舞臺へ來り案内を乞う左源太自ら取次ゑ出玄關ゑて相挨し吉良ハ大月よりの結納と持參したるとて是を渡す左源太受取て受納書と

認んト云(吉)まづ〳〵御寛りトなされ拙者も當に致した御酒一獻頂戴」なぞと始終おかしみの臺詞左源太ハ苦々しいト云思入是より吉良ハ左源太へ種々追從のせりふ有ところへ上手より主膳出て受取を認めて渡す是より吉良ハ祝儀が貰いたいト云おかしみト、主膳に手酷く恥しめられて忽々に出花道へ入ト下手より以前のおなみおさご出玄關より直ゑ舞臺へ來るト主膳ハまた今日の御殿の樣子を娘ゑ咄しト、大月へ嫁入致せト云おなみハ何と云ても大月へ嫁ゑ行てと云忌じやト云を左源太乳母も側から夫でハ上へヤ分ゞの立ぬもゑ嫁でも有うが嫁入せいト進められて返答ゑ困りて私ゑハ云かわした男がゐ座り升ト云皆々愕りして主膳ハシテ其言かわしたトハ誰なるぞト問乳母も私ゞお側ゑお付ヤて居て其樣な事の有う筈ハないサア相手ハ誰で御座り升ト迫られて甚だ難義の場所へ下手より曾平次出て庭の技折戸の外ゑてお孃ゞの不義の相手ハ私めで御座り升トズツト内ゑ入ると乳母ハ見てヤイ悴大恩あるお主樣のお孃ゞを己れようも〳〵嗾唆とつたナト打擲する曾平次是を止て其折柴ハ尤だゞ罪を犯した此曾平次旦那樣のお手討ゑ成ゑやア成升ぬト主膳に向ひお手討ゑ成れて下されト云(主膳)ム、能覺悟なり兩人ともに手討ゑするト刀を拔て斬んト仕て兩

人ゞ擧動ゑ目を着扨ハト一ッ思入有て又振上ても恩愛ゑ引
され斬兼て刀を鞘ゑ納め両人とも何方へ成とも落よと云兩
人ゝ夫でゝ跡で御難義の係るゝ知れた事夫ゞ堂して見て居
れ升う夫より此場で二人ともお手討ゑ成れて下されト両人
死を爭ひ互ゑ目と目で知らせ合て自殺す是より曾平次いお
嬢様のお心根がお勞しさゑ云合せて不義者の体ゑなしてお
手討ゑ成心と本心をわゝす主膳も豫て二人ゝ不義でゝなく
我難義と知て不義と云立手討となつて此親ゑ武士の意氣地
を立さす心と推せしもゑ一倍不愍さ彌増て家名斷絶を覺悟
ゑて何國へ成とも落よと云しト互ゑ本心を明し合ての大愁
歎此件の内ゑ下手より〔大炊〕出て庭口ゑて内の樣子を伺ひ
居る夫より主膳ゝ氣を變て此趣〔〕を目付へ訴へ檢視を受ん
ト云ところへ「扉けゑ及ばぬ某きつと見届たト云なゞら
大炊庭口より入感心なる二人が心体人ゝ斯こそ有たきもの
ト云ながら二重へ通りて主膳ゑ向ひ（扨更めて此大炊ゞ實
殿へお頼みヤたき儀ゞ御座るゞ何と聞てゝ呉らるまいか
（主）更めてお頼とゝ（大）余の儀でも御座らぬゞ是なる二人
が余り不愍ゑ存ぜるもゑ拙者媒介致して夫婦と成て遣した
いゞ何と聞届けてゝ下さるまいト是ゑて主膳ゝ手負ゑ此
事を云聞すト両人喜び主膳ゝ座敷ゑ飾りたる雛の道具と持

て婚姻の盃をさせる手負ゝ漸ゑ弱るト左源太「紫雲靉
靆幕張ゝ取も直さず上品上生」ト地藏經の相方ゑて雛ゑ准
へたる別れの渡りせりふ有てト、大炊別れゝ盡ねど斯して
ゝ長く苦痛をさせねばならぬト是ゑて主膳氣を替て悴介
錯ト主膳左源太刀を拔て立かゝる木の頭幕を引幕の内にて
エイトのけ聲きこえる是をキッカケゑてシヤギリ
○宗十郎の浦井主膳ゝヤ分なしの上出來花道ゑ出て心配
なる思入ゑし舞臺ゑ來り衣服と着うへ小納戸の羽織ゑ成た
所どふも武張てゑし二度目の拵もゑし助太郎ト の應對も
始終快ゑからぬ思入ヤ分なし○おなみ曾平次ゞ不義せしも
ゑ手討ゑするト云所ゑて羽織を脱うけ襟を持てカラリと見
得をするゝ若い者ゝ何ぞの樣ゑて不受○堂も仕方のない物
で時々ゝ身を出し升○刀を振上て斬兼る思入もチト警すぎ
る樣ゑ思ゝれ升○併し何と云ても斯云役ゑ掛たら此人の右
ゑ出る物ゝ有ません
○家樹のおなみゝ案外の上出來万端可愛らしい所ヤ分な
し○先の出ゑ玄關ゑて内の樣子を立聞して自分を大月へ嫁
らせずゝ成まいト主膳が云ときモッと思入有たし夫より
自害まで娘の情ゞ離れぎ大出來〳〵
○小團次の左源太ゝさして爰ゞよいト云ところもないゞ去

とて少しもイヤな所ゝ見得ませんせん毎も氣障のない當時の賣出しぞことなく小氣轉の利たまイ役者であり升

○小團次も家橘も梅鉢の役所ゝいかゝな物主膳の紋ゝ地紙つなぎかゝ成た内ゝ梅鉢の樣でしたゞ只の梅鉢ゝ拜領でなければ着られぬト云心付ゞ有たいもの

○菊五郎の曾平次さしたる大役でもなく此人が仕なくても能からうト思ふ樣なれど扨違たもの遣が音羽屋だけの直打ゞ見得て傍が一層見榮ぞ仕升○譯もなくすらりト仕て居る樣でも始終意氣込ゝ拔目ゞなく○ト云て他ゝ障らず腹切まで大受け〳〵

○綱伴一重ゝ成て刀を付立一ト通りお聞なされてト竹笛入の相方ゝなるト勘平染るト云投書ゞ有升たゞ故梅壽も斯云れた事ゞ有升たが自然お家の樣ト見へ升

○鶴藏の吉良助太郎ゝ序幕の吉良ゝ頓と別人の如く此役ゝ鶴藏の本分を現した所ゝ始終おかしみの工合ヤ分なし此人も此位な事を仕て居れば外ゝ眞似てなし○花道ゝて中間との咄しゝら左源太ゝ追從云て居ト、主膳ゝ恥しめられるまで別ゝ何もせぬゞ自からおかしくなる所大當りで有升た

○油單をまくり結納の品を一ッ二ットかゞへるゝいかゝ胸でかゞへて貰たし

○團十郎の戸田大炊此所ゝさして見せる所もなけれど庭口へ立て内の樣子を伺て居る間だが早く出て長い間だ默ッて立て居るゝ如何ゝも舞臺を大切ゝ勤る所ろ感服夫より内ゝ入手負ゝ祝言させての幕切迄只さら〳〵ト仕てゝ居るゞ確ゝ見應ゞ有ました

○三幕目役割

中老政尾　市川左團次
久松三五郎　坂東家橘
深見十藏　市川團右衛門
奥女中柏木　市川猿十郎
同　明石　小川幸升
同　關屋　坂東竹二郎
同　浮舟　市川寶作
足輕伴平　坂東橘次
○　尾上菊五郎
○大月藏人　岩井小紫
○　岩井半四郎
中老玉笹
多賀家の妾お才

○多賀家長局政尾部屋の場

舞臺ゝ政尾部屋の道具ゝて花道より夜廻りの輿女中〔柏木〕〔明石〕〔關屋〕〔浮舟〕出て花道ゝて皆々過る上巳の御膳部ゝ何者か密ゝ毒を仕込有しを大月殿ゞ見出され夫より毎日此

通り御殿の内ハ嚴しい夜廻りト云心持のせりふ有て舞臺へ
來り上手の障子の際へ來て政尾樣お目覺でハ座り升かト是
よて障子の内より中老政尾出て皆々を勞ひ私しハ臥て居て
甚だ失禮ト是より政尾ハ笠原武右衛門ト云釼術者の娘よて
父よ別れてより大月の周旋よて奉公よ出たるト云節を云て
いるト時計聞へる(政)アリヤ八つのお時計是からハ私しゞ
お夜詰番あなた方ハ部屋へいてもつくり休息なされましト
是よて女中四人下手へと入夫より政尾ハお部屋樣のお頼み
よて大月樣へ今夜八つを相圖よお忍び有やう文よて申上た
るがもうお出ゞ有さうな物待ハ久しい事じやナアト唄上る
りよなり大月下手の杉戸より出る政尾見て上手へ通す是よ
て大月ハ今夜密よ忍べと有文の文言シテ何の用事なるやト
尋るト政尾ハ其お頼みとヤ升るハ私でハ座りませぬ
(大月)シテ其お方ハ(政)只今お逢せヤ升るト上手の障子の
内よりお才の方を連て出お才上手大月眞中よ政尾下手よ坐
り是よりお才ハ自分のお持ヤせし慶之助樣ハ正しくハ二男
で有なゞら金次郎樣がハ二男と極り慶之助樣よハハ三男よ
てハ家來同樣のお取扱ひ夫ゞハ不愍よ存升ゐ此事何とか
お取扱ひ下さる樣お頼みヤハ大月殿ト此樣なせりふよて頼
む事ある大月ハ思入有て如何よも承知致た拙者ハあなたの
親御よハ大恩を請し者ト云(才)大恩あるト仰あるハゞの樣
な事なるかト是より大月ハお才の方の親野村氏よ親長次兵
衛ゞの足輕と勤め在し頃厚き惠みよ關りしト云事を咄し(大
月)ハ二男ハ侍ハ惣領よもならるゝ工風ハ拙者ゞの胸中
(才)お嬉しう御座り升ト是より色摸樣よなる(政)委しいお
咄しハ是なる一間でト両人上手障子の内へ入政尾ハそこら
片付る此道具廻る

○道具替つて奥庭の場

下手より深見十藏忍の拵よて出伊賀流の忍術よて忍込殿
を害して呉ろトある彼の人の頼み是こそたしかよ殿の寢所
ト忍うトする此内上手より(久松)出て曲者を捕ントハ一寸立
廻りある深見ハ術と遣ひて久松の目を闇ませ懐中より密書
を取出し其場へ捨て花道へかゝる久松氣ゞ付ハテ心行ぬあ
の曲者と捕ントすれば忽ち身神腦乱なして彼ゞ姿の消失し
ハ不思議な事と見る物じやナア花道よて(深)大べらぼうト
宥々ト向へと入るト下手より足輕伴平箱挑灯六尺棒と持て
出久松よ行逢ふ此燈りよて落たる密書を拾ひ思入あつて
(久松)コリヤ慥よ浦井ゞの手跡(伴)アノ浦井樣ゞの(久)コレけ
して他言を「チヨン」致まいぞト此道具まわる

○道具替つて元の政尾の部屋になる

夜明烏鳴く政尾ハ上手の障子の内へ向ひもう夜明よなりますれバお餘波をしうハ御座りませうゞ人目よかゝらぬ其内よ早うお歸り遊ばしませト是よて上手より大月お才の方出大月ハ政尾よ思わぬ心配をかけしと禮を云お才の方大月の袖をひかへて大月さま必ずお忘れなされ升ナ足よて此道具水なしよて半廻りよなる

○正面へ長廊下を見せたる道具

政尾と書たる部屋の障子を明け大月お才出る大月ハ向ふへ目を付(月)なむさん向ふへ玉笹めがト大月ハ下手へお才の方ハ正面へ入るト花道より(中老玉笹)雪洞を持出て花道よりてハテ心得ぬ今の二人一人ハ確よ男の影掟嚴しい長局よ合點の行ぬ事でハあるト舞臺よ來る此内政尾ハ自分の部屋の障子の内よ立聞して居る玉笹ハ落たる簪を拾ひてスリヤ今の二人ハト思入有て幕

○左團次の政尾ハ近頃での大當りよて少しも加役とハ思へません○和らかな内よどころゞ仕た所が有て女中よ劍術の稽古をするトいふ心持も見へ遠大家の中老役ト確よ受取升た口恨むらくハ大月お才を歸すとき自分ゞ先へ出てあたりを見てから出したら猶能からう○イヤ〳〵廊下で玉笹よ見付られるのだから先よ氣を付てハゐるからう○何

々廊下へ出てゐら遠くへ見るト云思入だから矢張口さんの仰の通りゞ能うハ座いませう○扨是ハ私どもよハ委しく知れぬ事ながら投書の儘を記し升ゞ政尾ゞ部屋よ居る排らへよ地白ハチトおかしい樣よ思ひ升併し「是からハ私しゞお夜詰番」ト云せりふゞ有から部屋よハ居るゞ既よ役も名式服を用ひたものか○成程五尤で五座り升ヨシヤ其心よしろ地白へ帶付と云事ハけしてない事地白ハ襟よ用ゐる物も名チト中らぬ樣よ思ひ升×扨々君單ハ頑固よ覺へた物ゝな是ハ我等が考へよハ先よハ勤めよ出る時用ひた物だゞ大分ふるく成て着られぬもゝ部屋着よ卸したので有う裘紋付の對ヨ目も不用よ成ばチンネコ半天よ成でハ有ませんかロお說でハ有升ゞ奮與勤の方々ハ固い物よて式服ハ古く成て も決て部屋着よハ仕ません△地白の講釋感心致た物モ一ツハ堂でも能事なるが部屋の飾付日本製の時計と迄凝たらアノうもじの袋も直して貰いたい尤も拂亭流でハないゞ長かもじト書てつるして有と堂の賣物の樣よ思われておかしゝまた口を出すかうるさいアレハ下村かよしやへ誂へて出來てきた時の儘掛て有からあれで能のサ△ならば誂どのなば長かもじとかばの字をつけさうな物アレハ矢張㊙ゝこんな物を書て置て知らない見物よハ何だかシラヌと思わせる

も一ッの山ヤ○何ンシカレ仕打ヨ於テヤ分なし余人ハ知らぬ抽者共ハ大受で有ました

○家橘の久松三五郎此所ハチョット出る斗ヨで只さら〳〵として評なし

○國右衛門の深見十藏も評する程の事なし

○菊五郎の大月も此所ハさして評する程の事もなけれど夜明ヨ成て上手より出牢四郎の色氣の有のヨ少しも搏わぬ只まじめヨ仕て居るハ大請○廊下へ出て向ふを見る時も「誰やら人影」トでも云さうな所を「玉笹」めがト何へでも尖く氣の付工合ヤ分なし

○牢四郎のおオハ奇麗一しきの細工ヨてさしたる事なし

○色もやうヨ成てから堂も云ぬ程よかつた○併し政尾が容色がよいからおオの方ハ此人でなければ持きれません

○四幕目役割

安宅郷右衛門　市川左團次
高木淺右衛門　尾上梅五郎
野田八郎次　中村荒次郎
船頭　網六　市川寅作
若鳩蒲右衛門　尾上尾鯉五郎
河村慶次　中村政藤郎
○

大月瀧人　尾上菊五郎
○
左枝主馬　中村霜助
小道具屋金兵衛　坂東喜知六
大月のこし元　おこう　澤村清十郎
同　おむめ　尾上梅三郎
大月の伯父　大六　中村仲藏
大月の妻おてる　岩井半四郎
戸田大炊　市川團十郎

○大月新屋舗玄關先の場

幕の内より(龍右衛門)(慶次)立かゝり(八郎次)相談して居(龍)(慶)ハ庭を見物した体捨せりふヨて下手へと入八郎次殘りて毎日〳〵庭見物の案内ハ迷惑な事ト云て奥へ入花道より(主馬)出て花道ヨて大月が驕りヨ長じ田地を潰して庭となし大層なる普請ヨ仕たる故世人の謗り聞捨ぞたく今日ハ大月ヨ合てトクと戒諭を加へヨやならぬト舞臺へ來る奥より腰もと両人出て舅御様のお出の事をヤ上升うト奥へ入奥より八郎次出てこちらへお通りなされ升ト云主馬奥へ入花道より(大炊)出て矢張大月ぞ驕ヨ長じたるト云せりふ有て「また押かけていやごらせて遣うト舞臺へ來る八郎次ハわるい人が來たトいふ思入大炊ハ大月殿ヨ逢たしト云(八)大月ハ他行致たト云(大)ソリヤ偽りで有ラ今鳩川の堤より

見た時坐しきよ居られたい慥よ大月殿で有たト云八郎次間のわるきこなしよて見て參り升うト奥へ入(大)おぢかして遣たら彼奴こまつて居るわいト云笑つて居る所へ奥より淺右衛門出て主人い只今裏門より歸宅致し升たト云此所へ奥より大月出て戸田の御前よい能こそは出先奥へお通り下されト叮寧よ相挨す(大)イヤ宜も參らぬ不相變酒の無心じやト瓢と出す淺右衛門取て私が詰て參りませうト奥へ入(月)マア夫でい餘り端近一寸奥へお通りト進る(大)イヤ奥へ通るト普請の摸樣も何とか云て贅ねばならぬ拙者い至て不風雅で木品の名い左ッ張知らぬもゐ甚だ迷惑反てこれゞの勝手じや(月)然バは前樣のお心任せコレお滿團をもてト云(大)イヤ搏わしやるな拙者い窮して居るから宅よ在ても褥なぞ敷た事いなく驕た事い大嫌じや兎角成上り者い傲慢てならぬト挾から火打道具を出して莨を吸で居る所へ花道より道具屋金兵衛出て直よ舞臺へ來りお誂への品と研て參り升たト出す大炊見て金兵衛何を持て參た(金)ヘイ、、ト云乍見せぬ樣にすると大炊い大月よ拜見致たいト云是よて金兵衛箱入の鎗身を見せる大炊見て是い覺えのある身じや津田助廣では坐らうよい身だ何程でお求めなされた(月)五十金で求めました(大)何五十両コレ金兵衛モウ廿両直賣を致したナト云れ金兵衛い何かちやらと云て胡魔かすを大炊いヨイハ當家なぞい金滿家もゐ高く賣付るい其方の働きじや此大月殿も元い足輕長次兵衛の悴で有しゞお茶道よ召出れ長源坊と云しト昔の事を云て居る所へ奥より淺右衛門瓢を持て出大炊よ渡す大炊受取て禮を云また無心よ參るで有うコリヤ飛だよい酒の問屋ゞ出來たト殆終いやゞらせる臺詞有て花道へは入金兵衛い鎗の拵を請負て下手へ入る大月い揚幕の方を見詰めて思入有淺右衛門此樣子を見て扨前樣は殘念では坐り升るかト是よて大月氣を替てイヤ何も殘念な事いない決して左樣な事をヤなト云て居る所へ奥より妻おてる出て先刻里の親父ゞ參り升ては目よ掛たいとヤ升るト云大月眞御ゞお出なら一献酌で緩しヤさんト三人奥へ入ト花道より伯父大六出て花道よて是も大月ゞ驕りよ長じ世間の噂がよくない故今日い是非逢ていけん仕よやアならぬト舞臺へ來りヲ、爰だ〳〵と玄關ようろ〳〵仕て居る此時八郎次奥より出て其方い何者だト尋る(大六)ヘイ私い爰の大月ゞんよ逢たくいて參つた者ではゞ坐い升ト云八郎次忙れてコイツ狂人と見得るわいト云ば大六何氣遲でいは座いません久安寺村の大六だと仰しやつて下されば直分る者で御座い升(八)エ、そんな氣遲爺よお逢なさる樣な御前樣でいない通

れ〳〵(大六)へエ左様なら通りましても宜御座い升か(八)
チ、通れ〳〵ト是よて大六玄關へ上り奥へ通らうトするエ
、彼らへ通れとヤのでいないわへト突飛して奥へ入る大六
ハ思ひ直して成程ナ斯な形で來て主人よ逢てへト云から氣
遣だと思われるも無理ハねへ一ぺん歸つて庄屋殿の所へ行
て衣服を借て立派な形を仕て來て遊ふ斯な形で逢よ來たら
彼奴も外聞ぐわるうらうト云なら花道へかゝるとチョ
ボ」月ハてる〳〵浦井ハ曇るト大六これを聞て今門前を唄
つて通るあの唄ハ在郷迄の流行でアノ月ハてる〳〵ト云の
ハ大月が事浦井ハくもるトハアノ主膳様よハ身よ覺へもな
い事で禁獄のお身のうへ角の梅の木とハ角屋敷の佐渡様の
事アノ佐渡様ゞ今よ燈を立て浦井様ハ明いお身と成月の光
りハなくなるト云心ださうだアレを聞ちやアちよつとの間
も打捨ちやア置れねへ譬へ何と云れやうとも是非逢て異見
と云よやアならねへトまだ舞臺へ來る此時奥より安宅郷右
衛門出て是ハ〳〵伯父御様よハ能ク入來先々お通りなされ
ませト云て居る所へ八郎次出てこの節まだ爰よ何を仕て居
る(郷)アヽこれ〳〵此お方ハ御前様の伯父御様であるト云
(八)へエ左様でハ座り升ウ(郷)イザハ案内ヤ升うト是よて
大六草りをたいて懐へ入る(八)穢ない草りを(大六)ナニ

草りハ穢くツても「木の頭」よて二重へ腰をウけ足ハ此通り
でハ座い升ト突付て足の裏を見せる是よて廻る

○同奥座しきの場

揚幕より郷右衛門先よ大六兩人出直よ舞臺へ來り(郷)只今
主人お目よかゝるでハ座り升う○こし元泉お茶莨盆ヒト云
て下手の襖へ入奥よりこし元兩人茶莨盆樽ヒう運ぶ此内大
六ハ座しきを見廻してきもを潰して居奥より大月出るト大
六恭〳〵しく辭儀をする(大月)夫でハ反て恐入升ト云れて氣ゞ
付急よ驕傲よ成ふとんの上へ座りて咄しをする(大月)ハ
用繁多よ取紛てふ沙汰と致したト云事から両親よ別れて今
でハあなた様を親の樣よ思つて居ウ升ト云(大六)夫ハど親
の事を思ふならト腰より位牌を出して見せ是この位牌ハ手
前の親長次兵衛の位牌是を十八年ゞ其間だ己ゞの所の佛壇へ
居ウ斯んな立派な普請をする身分よ成なゞら此位牌をな
せ引とらぬト是より大月の心が素でないト云事から世間の
噂がわるいもふ心配で夜の目も合ぬこの堂ゞ辭職して在所
へ歸り元の百姓よ成て呉ろト懐中より手拭よ包たる鎌の刃
を出しもし大月ゞの不承知ならさしちゞへて死ぬト思ひ込だ
る体よ大月も納得して直よも辭表を出して在所へ引込ト云
是よて大六も安堵してキット言をつゞへたゞト云て歸うト

する所へ浅右衛門出て伊藤内蔵し升ト両人花道へ入下手より郷右衛門出て只今襖のかげよて承われば辭職との事まとは本心では座るかト大月の胸中をさぐる大月ハ思入有て「思ひきらぬハ成まい（郷）此心を察し成程是ハト思入有て「思ひきらぬハ成升まいト云ず語らぬ大六を殺して仕舞ふト云事を思入よて聞せ大月ハ大六の忘れたる莫入と見付幸ひ是と手掛りよト郷右衛門よ渡す（郷）成程是ハ伯父御様の莫入歸りハ慥よ鴉川堤跡迫のけてお渡しやさんト花道へと入此道具廻る

○道具替つて鴉川の場

爰よ網船のうちよ（大炊）（船頭網六）居る大炊網六よ酒を買て來いト云網六ハ前様ハ酒をお持なすつたでハは座いませんか（大）アヽ此瓢のこれハ氷だト云是よて船を岸へつけて網六土手へと上り上手へと入跡よ大炊ハ大月より持て來り し酒を川へ捨て居るト上手より位牌流れ來る大炊ハ是と取上船の艫よて見釋の妙源信士俗名大月長次兵衛コリヤ大月が實父の位牌ト思入の所へ網六酒と肴を買て歸り來り是より暫く酒を飲事あつて（網）私しが一網やり升うト立大炊ハ舫を解て艪を押網六網を打ト何かへ係りたるか網が上らぬト云大炊取て網を引上るト大六の死骸ついて上る網六おどろく大炊ハ燈を見せろト云網六燈を出を大炊熟々見てコリヤ大月が伯父大六の死骸殊に數ヶ所の太刀疵思入有て「扨こそ彼奴が「チョン」此道具まわる

○道具替つて元の大月の居間になる

大月高木居て高木ハ金兵衛より鎗の身出來して參りしト咄して居る所へ揚幕ゟ郷右衛門出直よ舞臺へ來る大月見て郷右衛門歸りしト是よて高木と遠ざけて様子を聞（郷）鴉川堤ですッ張と仕留升て御座升ト云（大月）是よて身も安堵致したト云て居る所へ高木出て只今戸田様がお出にて是非お目よ係りたいト仰で御坐升ト云郷右衛門聞てエヽ深夜とヤ何とう云て歸せばよいよ（高）ヘイ私しもさう存升もゑ斷らうト致升うちよ毎奥へ通つた事もないにこの〳〵上つて來られ升ト咄しのうちよ下手の襖より大炊沈醉仕たる思入にて八郎次付て出る（大炊）先刻冠戴の酒のお禮よ今宵の得もの進上やさんト存夜中熊々參つて御座るがチト子細御座れば彼等と遠ざけ下されト是にて八郎次高木下手襖へ入大炊懐中より切前の位牌を出して大月よ見せる大月ギョッとする大炊キットなつて希代な得物がト云又醉たるこなしにてさう堅くヤよも及ばぬ事かト云ながら大月の膝を枕に寐て仕舞（大月）御前様にハ大分よい御機嫌お風と召てハ成升

ぬト云是ヨテ郷右衛門刀の拵へ手を掛斬ふトする大月思入
ヨて此位な事でめつたヨお風を召やうな御前様でハないわ
いト止める大炊ハ目を覺して酔のさめたこなしにて先刻ヨ
り何か失禮ハなかりしかト云此時奥よりおてる氷を持て出
御前様お冷と召上りませ(大炊)ヤ是ハおてるどの毎お美し
い事だナ是でハ頂戴せずハ成まい(てる)御意ヨ入ましたら
お代りをト云大炊氷呑を取て一寸思入有て態とこぼす水の
頭大月キット思入ヨて幕

○左團次の郷右衛門ハわるく云所ハ少しもなけれど爰でハ
斯と云て見せる所なきもゑさして評する所なし口大六を追
て入る時股立を取ハ行々敷ト云評も有升たゞ此位ヨせぎハ
劇場ヨ成升まい二度目の出ヨ羽織を抜ての出ハ請升た

○菊五郎の大月も序幕とハグット見識が變つて重々敷見得
ヤ分なけれどさして評する程の事なし○玄關先大炊の引込
を見送る所例と違て何も仕ぎヨ向ふを見る所よう御座升た

○幕切大炊ダ酔たふりで氷をこぼす所の思入も確り應へま
した

○仲藏の大六無類〳〵玄關先ゟ異見にのゝる迄一點のヤ
分なし就中座しきへ通りこし元が茶菓盆をとこぶをバか叮
寧辭儀をする所から床の間へ上つて掛物と見る正合墓石を

喰うとして止氣味合實ヨ眞似の仕手ハ有ません扨是迄の所
と打て變て異見ヨなつてから盲が發氣り仕過て今迄ハ何も
知らぬ田舍爺の眞似を仕て居たのかと思ふ程で有升たハ堂
云心持ゥ但し爰ハ此位しめて仕なくてハ應へぬト云心持か
何ヨしてもあまり始とハ不似合のやうヨ思ひ升た○殊ヨ歸
りゞけヨ「キット言とつゞめへたヲ」などハ武士のやうで有た
○何も爰をさう悪く云わけでハなけれど先が好すぎるゆゑ
で有ませう○是ヨつけてもあまり場當りを好むハ吉あし
□莨盆ヨ蒔繪の有るを見てお雛樣の道具を出目鏡で見る樣
だトハおかしみハ有るが余り氣がきゝ過ませう
□久安寺の方丈樣ゞト云れしが釋何々の戒名の樣子でも眞
宗の樣子もゑ(ゐ)院主トカ御坊樣トカ云て貰たし

○半四郎のおてる何も仕ぎ評なしシカシ病氣の節小紫が代
を仕升たが幕切ヨこぼれた氷をふく拠梅など譯もない事だ
ゞの斯も違物かト思升た

○團十郎の大炊玄關先の所ヤ分なし鳶八丈の羽織に引かけ
の紐大請〳〵○鳴川網打の場稽古着を用ひた所感服〳〵夫
より網六ヨ酒を買にやり跡ヨて大月より持て來りし酒を川
へ捨てる所も別に仕ぐさなしで大よし○少し有トヤハ網六
が一網打て何かへ掛たか網があがらぬト云所ヨて少し斗り

網打の穿ちのせりふが餘り商賣人じみて不請なり○大六の死骸を見て先刻の位牌ト云扨ハキャッらがト思入旨い事〳〵○道具替つて大月の所へ來ての醉たるこなしヤ分なし○大月が位牌を見て恟りする所よて「きたいな得物ぞ」ト市川流で云う所嬉しかつた〳〵○幕切水をこぼす「大月」思入御両人〳〵

口寶作の網の打樣上手な物役者ト云物ハ器用だとの投書が有升た

○五幕目役割

中老政尾	市川左團次
浪人軍八	尾上梅五郎
同傳藏	大谷門藏
奥女中柏木	市川猿十郎
浪人多九郎	中村荒次郎
奥女中明石	小川幸升
同關屋	坂東竹二郎
同浮舟	市川室作
役僧空月	澤村百蔵
西條寺の所化	中村碌六
同	尾上音扇
同	尾上幸氷
供廻り	坂東薪助
西條寺の所化	市川丹助
供廻り	市川黍藏
供廻り	坂東利喜藏
○	
大月藏人	尾上菊五郎
○	
芳助娘おひな	澤村百の助
こし元もかり	市川さい三
同初音	岩井杜久三郎
同繪合	中村駒三郎
同若菜	澤村清十郎
同竹川	尾上梅三郎
中老玉笹	岩井小紫
鳥屋芳助	中村仲藏
多賀の妾お才の方	岩井半四郎

○西條寺門前の場

幕の内より(役僧空月)(所化)四人ようやく六音扇幸氷丹平居て今日ハ多賀家御先代樣の御法會よてお部屋樣ゞの御參詣なさるト云せりふ有て皆々門の内へ入ト向う揚幕より(お才)(政尾)(玉笹)女中八人(加役)猿十郎幸升竹二郎寶作(中二階)梅三郎清十郎駒三郎杜久三郎供廻り五人薪助廣藏利喜松黍藏付て出花道ヱ並びせりふ有て舞臺へ來るト門の内より役僧先ヱ所化四人出お早い御參詣ト相拶のせりふ有て讀經の支度も御座り升れバ御免と禁り升るト僧皆々門の内へ

入るト(政尾)お部屋様が御丹精の其お花玉笹殿にい一足お先へお出成れて御靈前へお備へ下され(玉笹)畏まり升たト立お花をお備へヤ升うト玉笹先よ(中二階)四人ついて門の内へ入(政尾)加役の女中よ今お部屋様へ内々ヤ上る事あるもゑお前がたい爰へ誰も來ぬ樣よ氣を付て下され(加役四人)かしこまり升たト四人い上下へは入是にて政尾いお才よすり寄御大切なる御身もゑ人目を憚り其後お逢もなされ升ぬが幸ひけふい彼お人も御參詣との事若お文でも參り升るなら私しがお屆ヤ升う(才)斯も心の逢ものゝ幸ひ認めて參つた此文堂ゞ人目よかゝらぬ樣にト出す政尾請取てお氣遣ひ成れ升な若い女中達よ劍術の稽古を致升れバ譬へ男とさし向で咄しと致升ても色氣のないゞ身の一德ト咄しの内に揚幕よて人聲する上下より以前の女中出て浪人者が喧嘩を致し升るト是よて皆々門の内へ入る揚幕より軍八傳藏多九郎醉たるこなし烏屋万助鳥籠を持た儘、三人に引立られて舞臺へ來る是より三人の浪人い万助ゞ往還にて我々よ突當りしもゑ勘弁ならぬト無理を云て居ると傳藏が扱ひよて万助三人よ謝るト償金ヶ出せと云て難義の所へ門の内より政尾出て万助を畜ふて三人を宥める三人容ヱト、立廻になる此はづみよ鳥籠の紐を切る鶯かごを離れて飛行万助い是を追ふて上手へ入浪人い支へかねて下手へ逃る政尾これを追て下手の方へ行此間よ門の内より玉笹出て政尾ゞ落せしはこせこを拾ひて入政尾い元の所へ戻り女一人りを支へかね口程よもない卑怯ものト云所へ門の内より女中(實作)出てお老り衆が殊の外御心配なさるもゑ奥へお出成れましト是よて両人門の内へ入ト花道より百の助出爺さんが喧嘩を仕やしやつたとやら若怪我でも仕いせぬうト案じるせりふにて舞臺よ來る上手より万助出て行合是よて万助い喧嘩の樣子を咄し夫に付ても大切なアノ鶯を逃してい明日から炊煙よ困るアノ三光の鶯の賣れぬ内い是ゞ賣升ト拂ひ升るト云たもゑ人も勘辨仕たなれどアノ鶯がなくてい二人の者が喰事ゞ出來ぬト歎き合事あつてトヽ万助い死で仕舞ト云お離これと止めてわしゞの死ぬト両人死を爭う所へ門の内より大月出て両人を止め其鶯と百金よ求めて遣すト云万助愕りして其代呂物ゞなくなり升たト云(大月)ないい承知今日い大殿の追善よ幸ひなる放生會ト懷中より百兩出して万助よ惠む是よてお離此ゞ恩を親ゞるためよ無給金で水仕女よお遣ひ下さる樣と頼む大月いいつでも連て來いト万助よ云両人厚く禮を云て花道へ入日覆よて鶯なく(大月)嬉しさうよ啼をるわいト是を木の頭よ道具廻る

○道具變つて西條寺客殿の場

中老玉笹先刻門前よて拾ひたる政尾のとこせこを出し中の文を見て（名宛ゝなけれと日下部流○是で樣子が知たわいなト元の通りよ文を仕舞衝立のかげへ入上手より政尾出てはこせこと無した思入よてうろ〳〵尋て居る衝立のかげより玉笹出て其おはこせこゝ是でゝは座り升ぬのト出す政尾ギョット思入有て如何よも夫ゝ私のはこせこでは座り升ト云是よて玉笹はこせこを渡し中改めてお受取下されト云政尾○あなたの事もゑ此中よ蹈躇の有う筈ゝない（玉）コリヤさう無てゝ成升まいさやうならバ私ゝお先へ參り升るト花道へ入跡よ政尾ゝとこせこと開て文の開封仕て有を見てキットなりて立ト文ゝばらり開ごる「木の頭」幕

○左團次の中老政尾ゝ前よも評した通り此人近頃の當り役よてヤ分なし立廻りの間だ少しも躰ゞくづれゝ始終女の情を離れゝ感服〳〵ある新聞の評よ目ごのこわいの腰から下ごの男だのト云事が有ましたゞ何處を見て記れたか錦繪よ描て有のとゝ余程違い升△立廻りよて三人を追込で身形を繕ふ時はこせこのないよ氣が付爲く思入有たし

○同し中老役だのよ玉笹ゞ叮嚀よお辭儀をするよ頭を少し下げた斗りの挨拶ゝチト高ぶり過るか文を見られた落度も有故安目を賣ていいかゝ

○菊五郎の大月も此所さしたる所なし

○百の助のお雛も大出來〳〵の外言ばなし

○小紫の玉笹も只棒と呑だ樣で別よ話なし

○仲藏の鳥屋万助味い事〳〵大月から百兩の金を惠まれ是をお賞いヤてゝ辭ぬト押返し賞てト、娘と無紛金で奉公よ出すト云迄充分よ恩よ着玉合後の三上山で成程と見物よ承知させる懇應感服で有ました△前まくの大六とゝ發氣りと人が變てよく仕わけられ升た老功〳〵

○半四郎のおすの方も美しかつたとヤ迄の事仕ぐさがなきもゑ評なし

○三人の浪人ゝ梅五郎ゞの一番能く其次が荒次郎門藏のゝ堂も惡い僕とゝ見へずそして左ッ張醉て居ぬもおかし

○其外いづれも大出來〳〵

○六幕目役割

鳥居又助	市川市十郎
○	
安宅鄉右衛門	市川左團次
久松三五郎	坂東家橘
中澤甚平	市川團右衛門
高木淺右衛門	尾上梅五郎

野田八郎次　中村荒次郎
氷野平十郎　坂東竹二郎
若松彌三郎　市川寶作
名嶋龍右衛門　尾上尾登五郎
河村慶次　中村政壽郎
川どし　市川左い助
川役人幸三郎　中村島藏
川どし　中村碑碟六
同　尾上音扇
同　中村鶴次郎
川どし　大谷門兵衛
同　中村鴨右衛門
○　尾上菊五郎
大月藏人　尾上菊の助
○　中村霍助
又助悴又市　中村鴈七
左枝主馬　市川幅之助
遠見の多賀義信　尾上音丸
同　中澤甚平　市川左い次
同　左枝主馬　中村雀次郎
同　久松三五郎　市川團子
同　大月藏人　中村芝丸
同　鳥居又助
同　吉良助太郎
近習供廻り　三階のこらす
吉良助太郎　中村霍藏
多賀義信　市川團十郎

○六幕目築摩川乘切の場

幕の内より川役人幸三郎川どし六人居て今日多賀様お通りよて躍て此築摩川よて水馬の洪催ある由よ聞たれど此洪水でハ迚も水馬での乘切ハ出來まい是非連臺越と成て有うからさう極たら我等も骨を折て遣れト云付て居る川どしども連臺でしよ成様よ旨くやつて下されト頼む事有て前祝よ一ぱい遣うト川役人ハ上手川どしどもハ下手へ入ト揚幕より（安宅）（高木）（野田）（又助）（又市）を遶て出花道よて非常の洪水なりとのせりふ有て直よ舞臺よ來り安宅ハ又助よ我主人の恩儀ハ忘却ハ致まいなト問又助ハ浦和の宿よて既よ親子が死うト致たをお助下さつた事ハ死でも忘れハ致ませぬト云是よて安宅ハ此主人より其方へ頼むべき子細有ご何と聞てハ呉まいりト云又助ソリヤもうどんな事でも致升旦那様の事なら命でも惜みませぬト云是よて其子細とヤ付る前よ誓文が見たいト云又助無筆よて誓文ハ書ぬト云安宅ハ誓文代りよ悴又市を預うト是よて又市ハ野田ト高木の間だへ來る夫より安宅ハ又助よ密事を明し今日此洪水よ水馬よて乘切ある故汝水底よりくれ密かよ殿を刺殺して呉ト又助聞て驚き其事ばかりハ出來ぬト云安宅ハ人よ大事を明させて今ト成て頼みと聞ぬとハ惡くい奴それ人質の子悴と一

刀よさし通せト是よて野田高木又市を殺うトする又助い大月よ受たる恩と悴の愛よ拔さしならずトゝ殿様と首尾よく仕負せませうト受合是よて安宅差副を又助よ渡す又助取て自分の刀を安宅よ預けるト安宅い又助よいまだ密々談ぢる義もは座れゞ各方いその悴を連てお先へお出なされト是よて野田高木又市を連て上手へ入ト尙も又助よ云ふくめて上手へ入跡よ又助い思案よ暮て居るト揚幕よて下よ居う〳〵ト云聲きこへる又助思入有て上手へ忍ぶ揚幕より左枝主馬久松三五郎多賀義信大月藏人中澤甚平吉良助太郎水野平十郎若松彌三郎名嶋瀧右衛門河村慶次其外供廻り大勢付て出直よ舞臺へ來り義信眞中よ夫々能やうよ坐うト義信い豫て江戸出立の際より此築摩川を水馬よて越んト思ひ彼の生月磨墨よも專さ劣らぬ駿足を牽せたれゞ斯る際よ試みざれゞ名馬なりとて何よかせん洪水たりとて憶せんや是非とも水馬を催さんト云大月夫い匹夫の勇なりト强て止め遂よ不興を蒙るを皆々よて宥めトゝ水馬よて越と極り義信起て馬ひけト此道具廻る

道具變つて同遠見の休唄上るり一くさり有て上手より遠見の又助出て着物を脱郷右衛門より請取たる差副を鞘を拂ひ口よ咥へて氷よ飛込ト又唄上るり有て下手より遠見の義信大月久松中澤吉良佐枝主馬何れもちいさき馬よて乘切の遠見の心氷勢暴く越かねるこなし有てトゝ皆々岸よ着心持よて上手へ入唄上るり切る下手の小屋より郷右衛門出て向ふを見て皆々無事よ川を渡りしと見るこなしよて扨い又助めが氷中よて仕損せしと覺たりハテ殘念「チョン」事だナート此道具まわる

○道具變て旅宿の場

上段よ義信(中澤)よ髮を結せて居皆々居並び一同より無事よ川を越たるを祝す義信も皆々を賞して大月い如何致たト云(久松)彼いは不興蒙り升たるもあお次よ差扣へ居升る(義信)苦しうない是へ呼ト是よて下手より大月出る義信い大月よ向ひ今日無事よ川を越たるも汝が强て危しと止めし故心よ油斷を生せざりし故也予が爲よ命の親なりと賞し五百石加增と予付る(大月)思入有てソリヤ拙者一人へ(義信)イヤ一同加增ト付るト此件よて幕

○市十郎の又助この所いさして難なし先一通ト分なし○併し後よ殺される所よて固より殿様を殺さぬ氣で有しト云せりふが有が爰でい堂も一寸通れに受合様よい思われなんだ○一人りよ成て引込時天を拜むい勿体ないと云心意氣成べしと思いるゝが腹ダわのらぢ口高木と野田ぐの又市をさゝん

とせし時ア、畢まるなと云しい悪し

○左團次の郷右衛門別よ茲と云感服する所もなけれど扨少しも十分なしにて先い上出來なり

○家橘の久松三五郎さしたる事なし

○團右衛門の中澤甚平右同断

○菊五郎の大月い諌言の工合十分なし或人の説よい堂も腹から出た異見の樣でないい固りだが余りうそらしく有しと云かこゝとが有升ダチトは無理かと思ひ升爰らい理屈の付やうで堂でも云へますが先斯な物で有ませう余人い知らぬ我等い大請〳〵

○菊之助の又市爰よい何も仕ぐさもなきも名評する程の事なし

○遠見の面々何れも心持が有て水勢よ押流される工合よう出來升た○或人のわる口よい子供が大勢春駒を持て喧嘩と仕て居る樣だと有ました

○鶴藏の助太郎も此所さしたる事なし

○團十郎の義信いかよも殿樣の樣よ見得ました○筑广川へ出る所歩行やうゞの余りはさ〳〵仕過るかと思ひ升たが水勢よ恐れぬ馬にて乘込うト云肝持の意氣込有てよし△其代り旅宿い確よ國主大名と見得升たこんな役い仕てよ爲り躰を うゞかしたがるが遠團洲丈感心〳〵

○其外いづれも大出來〳〵

□霍助の役い左枝主馬ト有升が此前幕と後の幕共人物ゞの違て青額で若作りで有升が外よ役割もなし此場の役い何と云侍ゞのハチナア

□興行が續て日柄が立て來るト立者衆が下廻りの役者と何う樂屋落を言て笑たりゾ〻ッたり仕升が宜ない事下廻りの役者も何かゞゝよおかしゞらせる樣子娘子供の見物い梅幸が笑たとうふざけたとの嬉しがり升が一日家業を休で見よ行大人連い苦々敷事と不服で有升新富座の大劇場へ勤る俳優よ有間敷事哉と小言ゞの有升は注意ゞの肝要〳〵立者斗りの場い遠よ右樣な事いなし

○七幕目　同返し

役割

○佐枝佐渡守	中村宗十郎
○鳥居又助	市川市十郎
○安宅郷右衛門	市川左團次
久松三五郎	坂東家橘
深見十藏	市川團右衛門
高木淺右衛門	尾上梅五郎

野田八郎次　中村荒次郎
佐渡の若徒　澤村百藏
大月の中間　市川小半次
同　尾上風扇
佐枝の中間　市川さい助
同　中村碑礫六
同　市川紅藏
佐枝若徒　坂東橘次
大月家來取次役　大谷門兵衛
○
大月藏人　尾上菊五郎
○
又助悴　又市　尾上菊之助
大月の妾お雛實ハ万助娘お雛　澤村百之助
大月の妻おてる　岩井半四郎
戸田大炊　市川團十郎

○鏡山紅葉狩の場

舞臺ハ一面鏡山紅葉盛りの道具爰ヨ幕の内より中間三人左い助まやこ六紅藏毛氈をかつぎ立掛り居て此節ハ殿樣ヨハヤレ鹿聞だの虫の聲だのと風流な事ばゝりのお慰み我々ヨハ甚だ迷惑だなぞト云て居るトさう云うちヨアレ〳〵向ふへお出ヨ成たト是ヨて能ところヨ毛氈ヶ敷揚幕より佐渡守先ヨ若徒二人(百藏橘次)付て出る跡より大炊出花道ヨて呼かけ互ヨ連もなきもゑ同道せんと佐渡守と大炊並で舞臺へ來り設けの席ヨつく是より小堤重を開き酒宴ヨ成盃巡りて後大炊より佐渡守へさし(大炊)例のお肴を致うゝなト謠ひヨ「老せぬや〳〵藥の名をも菊の水盃もうかび出て友ヨ逢ぞうれしき」ト是ヶ舞の咄しヨなり佐渡守ハ豫て望みし猩〻の亂いつぞは傳授を願ひたしト云(大炊)心易い事いつトやうより此席ヨおいては傳授やう併し今二三杯傾ようと續けて飲イヤ能程ヨ醉を發して居るさらば傳授やう併し秘傳の事もゑ暫時近習とお遠ざけ下されト是ヨて佐渡守ハ近習ヨ云付能時分ヨハ手を拍うヨ依て此所ヶ遠慮致セト是ヨて皆々上下へ入是より大炊起て「まれ人も居ぬらむ月星ハ猥もなしト」謠ひながら一廻して座り佐渡殿今日公ご望れし傳授の亂ハ猩々よていなく國家の乱で居ぬ座ちうがナト是にて佐渡守心腹を明し國鎌倉とも穩ゝならぬ當家の形勢老公ヨハ何と思わるゝ(大炊)されば拙者ご存ぜるヨハ彼の大月を深くお用ひ被成るもゑ(佐渡)いかヨもト是より友人ハ大月が舉動ヨついて不審少からざる事を議し(大炊)まづ彼ヨ荷擔の者共を捕へ嚴しく拷問致しなば白狀せざる事有まじ夫と証ヨ大月と詮議せんト(佐渡)同意して其事ヨ決定する(大炊)氣ばらしヨ一つお舞なされト是ヨて佐渡守

起て「蘆の葉の笛を吹波のつゝみぞうとうち聲すみわたる浦風の秋の調や殘るらん」ト舞畢る此内大炊ハ鳴物の拍子をうちかけ聲として居る佐渡守舞畢るト上下より近習出る（佐渡）まだ早いわい（皆々）デモ只今お手ゞの鳴升た（大炊）アレハ鳴物の拍子じやわいト両人大笑ひとなり（佐渡）今夕ハ自邸ゑ去がたき用事ゆ座れば失敬ながらお先へゆ免を裝るト佐渡守近習皆々入大炊殘りて山を見渡月下の楓ハまた搭別ト酒を飲なゞら上手の山の方へ行くゝるト虫の音息大炊思入有て今迄啼つれし虫の一時ゑ聲と止めしハト一寸思入有てイヤ虫もさう啼續けでハ聲ゞ枯るで有うコリヤ我等と同じ樣ゑ草の露でも吸てゐうト始終醉たるこなしよて上手の山の影へ入ト下手の藪より郷右衛門忍び奏よて鎗を持て出大炊の行かたを見送る思入有て向ふへ行かゝる見得よて此道具廻る

○道具替って

向ふへ湖水を見せたる道具よて坂道を下る心よて揚幕より大炊跡より郷右衛門矢張忍びよて津田助廣の鎗を持て出る花道よて大炊景色を賞すせりふ有てまた謠「よも盡じく萬代迄の竹の葉の酒くめども盡せ」ド謠ひなゞら舞臺へ懸る郷右衛門鎗と突かくるト大炊身を代して突損せ大炊一寸思入あつて是よかまわず「飲どもかわらぬ秋の夜の盞」郷右衛門また突ゝる是よて大炊鎗の柄を押へ「影もかたぶく入えよかれたつ」ト謠ながら立廻りになり郷右衛門懸て突かゝる（大炊）「あしもとはよろ〳〵とよいりふしたる枕の夢の覺ると思へバ泉ハ其儘」ト差副を拔て鎗の柄を見事ゑ切り「盡せぬ宿こそ目出たけれ」ト謠の切ゑ郷右衛門ト頭見合せる郷右衛門ハ一さんゑ花道へ逃てと入大炊ハ鎗の鋒を見て助廣なりト氣づき其まゝせゝら笑ふと木の頭ゑ幕

○同じく返し大月妾宅の場

舞臺ハ大月の妾宅の道具よて爰ゑ幕の内より中間二人（小半次風扇）又市ゑくゝ〳〵泣て居る兩人よてなせ毎日泣て斗り居のだト云又市ハお邸さんゑ逢たいト云（兩人）おめへ親父ハ築摩川から欠落をして行衛知れぜまた其内ゑい逢る事も有うから泣ぜゑ待て居るダよいト云ている所へ奥より鳥屋万助の娘おひな大月の妾と成て菓子を持て出是を又市ゑやり是よて三人臺所へ行て休ふト下手へ入お離のこりて日外西條寺の門前で親子が死うト仕たを助られしハ忠報じゑト水仕奉公ゑ上りし所奥樣のお情よてお手廻りゑ遭われ其上奥樣のお進めよて旦那樣のお情うけ斯して何不自由なく暮す物の旦那樣ハ毎日こちらへ斗りお出なされば女子の

心ハ同じ事奥様のお心根が思ひ遇れて心苦しい事じやナア
ト云て居る所へ上手より大月出るお雛ハ茶菓盆と運びもて
なすト大月ハ懐中より金百両と出して万助が參たら是を遣
せトいふお雛ハこれと受ぢ反て外ゑ貰いたい物が有と云大
月ハ何なりと遣うからヤて見やれト云お雛ハ私ゑお暇が頂
たうは座り升ト云大月何ぞ子細が有てさうヤので有う其子
細を云て聞せよト是よてお雛ハ奥様のお心根ぞ勿体なさゑ
お暇を頂戴したいト云大月感心して通常妾とヤ者ハ其主人
の寵ゑ誇り兎角本妻を蔑ろゑ致すものなるをそなたハ妻を
大切ゑ致て暇を願ふハ奥ゑ感心夫も忍ゑ暇も遣さうし又此
金ハ褒美ゑ遣わすト云お雛ハ堂も此お金ハ戴かれませぬト
云此内下手より深見十藏伺ひ出てそんなゑ不用な金なら己
が貰て置うトぢつと庭口より入大月キット成て何者なるぞ
ト問深見十藏では座るト二重へ通る是より先頃大月の頼ゑ
ては殿の奥庭へ忍こみ浦井ゑ自滅を取せた事を云てもすり
よなる此時奥より取次の者出て久松様がお出ては座り升と
云大月折悪しト云悪入よて奥へ通して置ト云是よて取次お
雛入夫より大月ハ十両出す十藏うけず何でも百両出ト云大
月ハ出さぬド云十藏懐中より大月より頼みの密書を出して
見せ強ていやなら此手紙を以て出る所へ出て貰うト云是よ

て大月百両出す此内上手の障子と明て久松此場の様子を伺
ひ居る大月一寸心付久松障子を立切る十藏ハ百両を取て行
うトする大月刀の拠へ手を掛る十藏振むく両人キットなり
然ば十藏(十)大月どん其内お目ゑ掛り升うト花道へ入と「
チョボ」よろヽり大月ハ今久松の事が氣ゑ係る思入よてお
才の方と密會せしと深見十藏が邪間ゑなる事なぞと云て夫
ゑ付てもアノ郷右衛門如何致したか早く吉左右聞たい物じ
やナアと云所へ揚幕より郷右衛門出て直ゑ舞臺へ來る大月
見て直ゑ内へ入(大月)郷右衛門首尾ハどうじや(郷)仕損じ
升たト面目なきこなし(月)何仕損せしト(郷)殘念至極ゑは
座り升るト是よて両人心配の所へ花道より浅右衛門八郎次
又助を引立て出直ゑ舞臺へ來り両人又助と捕へて參りしト
云下手より又市出て又助ゑ取つきお爺さん逢たかつたトな
く郷右衛門ハ庭へ下り又助を捕へヤイ又助汝ゑ是迄厚く恩
を着たるも水練ゑ妙を得たると見込ゑ今同の大事をヤ付ん
ためなり如何致して仕負せざりしぞト責る又助ハ脱ぬ所と
覺悟を極めキットなりて恐と愛とゑ引されて如何ゑも仕負
せ升うとハヤ升たが熟々思へば勿体ない堂して浅領主様の
殺され升う夫も〻へ始めから仕負ぬ氣で受合ましたト是より
大月ゑ向ひ意見をする大月ハ耳ゑも掛ぜヤョコ才な下良め

ト怒る(郷)八よ大事を明させて仕負せぬのみならず反て我主人を貶なす曲者ト是より皆々寄て散々よ打すへる又市ハ是を支へ親父ごどんなわるい事を仕升したか存じ升ぬが殺さよやならぬ事なら私を殺して親父をお助下されト詫る大月ハコリヤ又市よ不愍よハあるが迚も助て置れぬ奴もへ命を取のじやそちらへ退ておれト云れ皆々よ頼むト丶郷右衛門左程死たくば殺して遣うト又市の襟髪取て引寄鉄扇よて躰ぢうを突又助ハ又市が血だらけよ成し哀な体を見て大月と白眼だ恨ひせりふ有(大月)郷右衛門そちヤア獄されたで腹も立ふがもう能加減よ殺してやれト是よて又市を引廻して鉄扇よて眉見を強く打ト鑿の仕かけよて頭々血玄たゝかよ出て死ぬ夫より大月庭よ下りて又助の首と斬る此所へ以前の久松三五郎出て佐渡守よ恨があるもへ一味よ加へて呉ろト云大月承知せど久松ハ一味の印ト深見十蔵の首級と密書先刻もすられたる百両の金を出し大月殿の大望の邪間よなる此奴が首と其密書又百両之金も其儘お歸しヤト云よるて皆々氣をもるす此内よ上手の障子の内よ大月の妻おて是伺居てト丶自殺す此聲よ驚き引出すと苦腫なごらよ詫言とするおひな出て此体よ驚く大月愁の思入有てまた氣を替何と詫ても止まらぬト云(てる)ヱ丶お情ないト是よて落いる

此時奥より待ッ出て只今ハ殿より火急のお召でハ座り升ト云皆々顔見合せて夜中のお召何事なるかト云(大月)また團碁のお相手ならん聲へ如何成ことなりともそこハ何とか云くろめんト思入有て出仕致さんチョン上下を持にて幕

○宗十郎の佐渡守ハ品格ト云萬端ヤ分なし方今でハ何と云ても斯んな染りとした事で團洲のヲキをする者ハ此人よ限り升諧も中々感心で有ました○只不承知ない大炊が舞よなる前のせりふ「猩々のみだれを」ト目よ立て發氣りト云ハ宜ないやうよ思ひ升あろこハ矢張咄しの樣よ輕く猩々の乱を傳授して戴たいト云大炊近習と遠ざけて立一廻りして坐り公ごの望の乱と云ハ猩々よていなく國家の乱でハ座らうがト云是よて「遠ハ老公ト是から締る方が山が有て大よ能やうよ思ひ升霞仙子の樣よみだれト堅く際立て云と見物ダ此時直よハ丶ア何か子細の有事だなト思ふ故團洲の「國家の乱」がハへなく成升ら自分も損ずたも迷惑爰らハ注意有たし

○下よ記す投書ハ朝ハ見ぜ三幕目長局よりト仕て送られた評言でハ座り升△佐渡守確よハまり役にてすべてヤ分なし只顔の仕方が判官の樣でわるし此役ハ勝元とも違へば肉でいきたし殊よあるりの白さ〳〵○ハ尤でハ座い升ぐ二幕目よ浦井主膳と云役ダ有升から是ト一しよにならぬ樣且ハ相手

が老人もへト云注意で有升併しろりゝ仰の通りニハ座ゞ升

○市十郎の又助ゝ外ゝ類なし古今未曾有の仕打なり口チイ頭取さん能つてか悪つてゝ○東西〳〵此人ゝ當座でゝ始て腕まへを見せられ總て大はでゝて殊ゝ相手が菊五郎左團次ト云ものだから鬼ゝ鉄棒夫もへか可成評もようハ座い升た

×此人の評ゝ先さうでも云ぜゝ仕方ゞ有まい○尤京摭から來たての人ゝゝ新富座の舞臺勝手が違ふからでも有うが此一幕ゝ此人が一人り持切で暴れて仕舞て全体ゝ充分ゝ泣せなくてゝならぬ所なるゝ餘り騒ぎゞ恐ろしいので見物ゞ自づからおりしがり升た○一ゝ何々四ゝ河童トか俗評が有升たゝゝお仕合

□眼玉の又助ゝ中々達者ゝこなし升賢ゝ手も達者足も達者ト云ゝ器械の龜の子の樣だ

○家橘の久松三五郎ゝ先ゝ十藏がもすりを立聞して居る所品が有て中分なし後一味ゝ加わらんト十藏の首を持て來る所も爰ゞわるいト云所ゝ少しもなけれど只不似合ゝて堂見ても遣ひゝ來た人としゝ見得ましなんだ△先々斯なものかされど拵から顔の仕方迄堂見ても立役の若輩ゝて悪事へ荷擔仕相な人とゝ見へぬ何とか注意有たし

○團左衛門の十藏ゝつかりとしてよしト、引込迄さら〳〵と仕て凄みが有て大出來〳〵

□荒次郎の八郎次が梅鉢ゝ似た紋付を着升たゞ不心得なり又者が國主の紋ゝまでう紋なぞゝ付られぬ事也何でも多賀の狂言だから梅鉢と言了簡かとんでもチエ

○菊五郎の大月始めの所ゝさしたる事もなけれど十藏の忍びの術で入込だト云ところ少しも動せぬ工合例の菊五郎とゝ餘程ちがひて落ついたるこなしゞ分なし後ゝ又助ゞ出てからゝ萬事又助へお任セゞて何もせずゝ居るもへ反て大きく見得升た夫より上下と持の幕切迄ゞ分なし△おてるの自害と見て愁を仕過ると假名讀新聞ゝありしゞ左程の事もなし且好色者もへ隨分愁ゞ有てもよしまた久松が上手ゝて悪事と伺ひ知りたるより始終上手へ目を付るゝ遠音羽屋惑服〳〵十藏ゝ金を遣り同人が出て行とき一寸刀を拔のけるが一國を押領を仕樣と云人物ゝゝ如何爰らゝ○ゝて生てゝ置ぬト云腹斗りで見せたし

□黒羽二重ゝ加賀紋ゝよい處へ氣が付れ升た

○菊之助の又市ゝ総て小音羽屋の腕まへぞこともなく宜つた〳〵○鄉右衛門ゝ殺される所ゝ分てよく仕て居升鉄扇で躰おう刺かれて氣を失つたやうにぐたりと仕て仕舞工合ゝら眉見ゝ打れて死ぬ所なぞゝ子供の樣でゝ有ません○惜い

事よ又助がもう少し堂か仕て居たら最一ばい榮たらうよ口落入てから幕切迄始終手足をうごかして居るゝ感心〳〵まだ手當ゞ屆たと云死人の樣でした

○百の助のお雛拵へうら総ての事が通常の妾や圍者とゝ大よ異りぜこ迄も優しい氣立の女と云心持ゝ確よ受取ました

が餘り何も仕ない過て何となく喰たりぬ樣で有ました△おてるの自害を見て今一息うれいゞ有たしまた此位な腕前かゝ

○半四郎のおてるゝ爰へ出て自害する斗りの事よて少しも仕打もなく根うら詰らない役にて評する迄の事もなければ例之通りの賞言葉を遣うの外なし○然よ後よゝ小紫が代りを勤める成よ樣ましたゞ扨小紫よ成て見ると先よ見た太夫の貫目が分りて是程迄よ違ふ物かと感心仕ました

○國十郎の大炊ゝ何とも云われぬ程ようは座い升た猩々よ成てから舞ふりで立あたりへ氣を配つて坐り夫より相談になり佐渡守ゞ舞の切に上下より若徒出て「デモ只今お手ゞ鳴ました」ト云を「アレゝ鳴物の拍子じやわいトの大笑ひ旨い事〳〵○夫より佐渡守よ別れ一人り酒を飲なゞら山の方へ行かゝる時虫の聲の息に氣の付工合思入ゞの有やうで無やうで確りとこたへて不思議〳〵○道具替つて鄉右衛門との立廻り迄一點の才分なし○アル新聞の評よゝ國洲を評してト、鎗の柄を切幕切迄餘りキザけが無つたト有ましたが堂いう意味の近頃國十郎の仕た事よゝ躰よとまつた事とてまらぬ事とゝ有て隨て評判のよい事も惡い事も有たゞ仕打に於て氣障けの有た事ゝ私共の目にゝ覺へなかつた○イヤ尤では座り升アレゝ目で見て鼻で嗅のでゝなく最眞で見て最眞で記はんの末廣屋の挑灯持丈の事にて評判記でゝ有ませんからお構なさるな委細ゝ歌舞伎新報の客物語りに假名垣先生が評され升た今よこつちの番で有うと冷々して居升口此紅葉狩よ毛氈を用ひられし注意ゝ大請〳〵大劇場ゝ搭別〳〵

○八幕目、役割

○佐枝佐渡守	中村宗十郎
○安宅鄉右衛門	市川左團次
久松三五郎	坂東寀橘
浦井左源太	市川小團次
中澤甚平	市川團右衛門
高木淺右衛門	尾上梅五郎
吟味役長兵衛	大谷門藏
同　十平	市川猿十郎
野田八郎次	中村荒次郎
足輕	尾上音扇

同　大谷門兵衛
同　中村鶴太郎
同　坂東蕨助
近習　尾上幸水
足輕　中村鶴右衛門
近習　中村昇三
足輕　市川丹平
近習　坂東利喜松

○大月藏人　尾上菊五郎

○左枝主馬　中村霍助
近習　坂東家久之助
足輕　市川紅藏
近習　市川廣藏
近習　坂東喜知六
醫師横田鎌齋　中村霍藏
吉良助太郎　市川團十郎
戸田大炊

○多賀家詮議之場

舞臺い白洲之道具爰ゑ幕之内より長兵衛十平下ゑ淺右衛門八郎次足輕四人（鴨右衛門紅藏丹藏鶴太郎）並び居て淺右衛門八郎次い大月の悪事と白狀したる所ゑて八ッの時討なるト奥より佐渡守ニ士二人付て出長兵衛十平平舞臺へ下る（佐渡）郷右衛門を呼出せトいう長兵衛下手ゑ向ひ呼郷右衛門ゑ縄とり二人ついて出る佐渡ハ種々の証跡を擧て吟味する郷右衛門白狀せざ此内ゑ奥より大炊出て此吟味を聞て居る夫より大炊い鴉川ゑて大六を切害なせしい其方ならんト云（郷）矢張知らぬト云是ゑて（佐渡）其際出合し者と今逢せんト是ゑて奥より左源太出て郷右衛門ゑ其時手裏釼ゑ打たる紋付の小柄を見せる（郷）同じ紋いいくらも有ト矢張伏せざ（大炊）鏡山ゑて切取し澤田助廣の鎗を出して責る（郷）同作の物いくらも有ト云是ゑて（佐渡）此上い拷問致せト云長兵衛十平立て郷右衛門を打（郷）白狀せざ夫より左源太い両人ゑ代て拷問せん事を願う（佐渡）其方い拷問すべき役ゑあらねど事情を察して免すト云左源太下へおりて郷右衛門ゑ向ひ親主膳ゑ密の罪を負せしも汝が仕業で有うト嚴しく答（郷）白狀仕たとてない命堂でも勝手仕ろト云（佐渡）彼れと假牢へ絆き置ト是ゑて皆々下手へ入ト二重の次の間より大月ニ士四人ついて出縁側ゑ座る士四人入る是より大炊佐渡替る〳〵証ヲ擧て責問大月い何と云ても事を左右ゑ枉て伏罪せず此内久松三五郎出て深見十藏ゑ所持したる密書之寫を見せる（大月）自筆ならねば証ゑならぬト云左枝主馬出て娘てるい既ニ自殺致して其方の悪事を諫めたでいないかト云ども矢張知らぬと而已云（佐渡）序幕の配膳の事を云其

時立合し醫師鎌齋を呼出す上手より鎌齋出て家て中上たる通りト配膳へ自ら毒を入愚老ゑ立合せしト云事を白狀す（大月）ハ矢張覺へないト云（佐渡）然ば拷問致ても白狀さすト云（大月）樣より下んトする時大炊これを止めて「ソチヤ拷問と受る所存かト是より大六ハ其方ゞ伯父ならぢや彼ゞの非業の死と遂げしも更ゑ憂うる所もなく某ハ彼ゞの菩提寺ゑ至り樣子と問しゑ一度も供養もせざるよしト是より大月ゞの身分を登庸されしも君の恵みゑ外ならずト厚く諭され大月是ゑ感じて伏罪するト甚平助太郎も出て伏罪す下手より郷右衛門出て主人が白狀致すうへハ何をか包んト是も白狀する此時近習出て中老政尾只今白狀致して座り升るト云是ゑて大炊佐渡安堵して（大炊）佐州ゞの旨くまゐつたナ（佐）存の外都合よろし是トヤも老公の配慮ト是より大炊佐渡が種々ゑ計策を巡らして爰ゑ至りし事を云大月安宅思へば殘念（大炊）多賀のお家ハ萬々歳ト是ゑて幕

○宗十郎の佐渡守ハ益ゑ〳〵し吟味の物ゑ係つてハ大丈夫〳〵

○左國次の郷右衛門ハ爰ゞの一番の見せ所ゑてゞこ迄もまぶといい仕打ヤ分なし○少し有ハ左源太ゑ打れてから何とか有て「白狀する物かへ」とチッニ訛るハチト聞ぐるし

○家橘小國次さして評する程の事なし

○菊五郎の大月ハ此所ゞ一日の眼目ゆへ當人もミッチリとするゆへ一段見應へゞの有ました○大炊の說諭ゑ感じて自ら頭と下る工合ヤ分なし

○國十郎の大炊ハ只感服〳〵

其外大出來〳〵○喜知六の鎌齋更紗の下着ハ如何ゑも醫者のやうゑて大請〳〵

○大詰　役割

鳥屋萬助　中村仲藏
番士　坂東竹次郎
同　市川寶作
同　坂東橘次
同　尾上風扇
足輕　澤村百藏
同　市川小半次
同　中村島藏
同　市川黍藏
萬助娘おひな　澤村百之助
大月藏人　尾上菊五郎

○三上山籠牢柵外の場

舞臺岩山高き所ゑ牢と設し体闕門ゑ柵を搆へ爰ゑ足輕四人番として居る（お雛）在郷娘ゑ身とやつし足輕ゑ酒と振舞呑せるせりふ宜しくある此酒の中ゑ眠り藥が仕込ある故トヽ

四人の者そこへ倒れる爰へ下手方鳥屋万助鳥さしの形よて忍出（娘首尾能いつたかト足輕四人を谷間へ引摺落し（万）お恐拵とい言なから大月様い此山の鳥も通いぬ嶮岨へ箋牢のお苦しみせめて困苦をお救ひ申たいと日頃親子が密をやつし漸々爰迄入込しゞの堂か首尾能やりたい物だト云内謠の聲聞へるアノお聲を便りよと矢來の内へい入此矢來の道具上へ引て取る

○同しく箋牢の場

岩の上よ牢をゑつらへたる道具床の上るりよなる牢の内よて（藏人）身を悔しせりふある下手方以前の（万助）（おひな）忍び出て鳥さしの竿へ短刀を結び付牢の内へ入る（藏人）是を取て短刀を入て呉しい何者じや（万）（ひな）ゝィ鳥屋万助親子の者と是方互よせりふ渡る其内向ふ揚幕よてドン〳〵〳〵と太鼓の音聞へるよど（藏人）い其方達い少しも早く此場を立退と云両人い下手竹藪の内へ忍ぶト花道方竹二郎番士四人（寶作）（榾次）（風扇）野牢天の拵よて十手ゞ持出來る此内（大月）い短刀を腹へ突立る番士い此聲を聞付さてこそ怪しいト牢の錠前ゞ明る内方大月血よ染て出る番士を相手よ立廻り有て（大月）アヲ有難や今宵こそ本懐ゞとげし此切腹と此聲を聞付（万ひな）両人伺ひ出（両人）そんなら此間に（大月）少しも早く落延よト此もやう宜く四人とかせよ立廻り有て腹を切落入（万ひな）両人い下手へと入る此道具居處よて其儘打返す

○大切浮るり役割

手子舞吉五郎　坂東家橘
同　米吉　市川小團次
同　万右衛門　市川團右衛門

○

同　紅藏　市川市十郎
鉄棒引小百　澤村百之助
手子舞松七　中村鶴助

○

鉄棒引小むら　岩井小紫
手子舞眼八　中村雀藏
祭の世話役千右衛門　中村仲藏

○湯島天神祭禮の場舞臺い軒でうちん進上の鏡山ト云酔の酒樽を積上げたる体處々よ梅鉢の紋の幕張爰よ清元連中浮るりよ成花道より獅々頭をかつぎ牛天股引にて（團右衛門）（つる藏）先よ（家蔦）（小團次）（雀助）（市十郎）出てせり上り一寸ふり事ある跡より（百之助）（小紫）（藝者鉄棒引肌脱の拵へよて出跡方（仲藏）拍子木を持世話役よて出花道よてふり事有て舞臺へ來る是方皆〳〵宜く振事有て床机へ掛

る向ふ花道より睦連俄狂言の趣向みて五人男對の衣裝好み
の拵にて出る

一男達不忍辨吉　岩井半四郎

梅の社の神垣へけふ參詣ゑ連立し五人男のまッ魁名も鴈金
の額ひ際まだ前髪も其儘ゑ若衆だてらとお叱りもかへり三
橋へ上方なら出て松源の達引にもつれた猪口のやりとりか
ら危ない命のやりとりも及ぬ腕に忍川腹の立のもごん〳〵
の水ゑ流して池際へ植た柳の風しだい元ゑ力も守島ゑ四人
の衆と後ろ立數ゑ加る不忍弁吉

一同根津の八重藏　中村宗十郎

生れ古郷の上方を水道の水でスッパリト洗つた氣でも生温
ひ數鶯の京育ちゆういふ出合も初音の里お先真黒闇の夜も
友と便りの螢澤いづれも様のお光りと頭に請て身の飾り秋
の錦の山紅葉顔も真赤ゑ醉たらば名ゑ太八幡の數力日常の
猫も虎となり兎でも相手ゑ清水町團子坂じやァねへけれど
誰がの團めゑ來様とも利ぬ勢ひの根津の八重藏

一同上野の鐘五郎　市川團十郎

春い櫻に八重一重こぞつて爰へ清水ゑ花見る人の長刀腕〳〵の
自慢の天狗杉日永の原をぶら〳〵とがらつく下駄ゑ詩を吟
じ月落烏の懼まれ口往來ゑ邪摩な涙人も今い昔ゑ袴腰大小

すて〳〵鴈鍋で茶椀でまはす車坂さま〳〵な酒も横合から飄箱
なさば忍ばれず摺ばち山かあたまの鉢落花みじんゑ打碎く
も異名ゑ取た雷ゑ鳴ひゝいたる上野の鐘五郎

一同湯島の三吉　市川左團次

神田生れゑ產神がらつむじい左りへ曲ッても身の行ひい眞
直ゑ關八州の觸頭妻戀稻荷が隣りもへいせんい狐で鳥居數
こした惡さも虫のせへスッパリ封じて堅氣ゑなり極印附の
遊び人を思ひきつたる切通し麹漬より甘口ながら蓼喰ふ虫
も數寄屋町下谷をきつて人中で口を利のも親ぶんと侍ひね
き樣のお影もへ祈らずとても守ると云神と力の湯島の三吉

一同根岸の松右衛門　尾上菊五郎

扨ぜんじりゑ扣へたい鶯春亭の會へ出て人ゑ知られた小万
年青い少さな形たか腹ッぷくれ田畑の布袋のまうし子で寺
島種ゑ氣ごの早く人先へ出る走り芋口ばし青い時分から日々
ゑ喧嘩と諏訪の臺それが簑輪の疵となり音なし川も大根時
泥ゑよごれた惡い名も鶯坂の玉の湯で洗ひ落して絹越の氣
も和らかゑ笹の雪今い達師の一本生土地ゑとびこる根岸の
松右衛門

半(けふ天神の祭禮ゑ宗「幕張なせし梅鉢の團(紋ゑ人數も
相生の左(千歳を祝ふ雪の松菊(梅も櫻もかへり花ゑ團(花
をかざつて五人(行ふかへ

ト此つらねすんて先今日ハ是さりト目出度打出し

○中村仲藏万助ハさしたる仕様もなけれバ評する迄の事なし上るり祭の世話役もさしたる事無し半四郎宗十郎病氣の節五人男の代りハ五苦勞〳〵

○澤村百之助娘おひなハさしたるお役でもなけれバ評なし鉄棒引ハきれい〳〵

○尾上菊五郎大月ハ此處ゑまり役ゑて大出來〳〵チョボゑゑまつてのうれい苔へ升た牢の穴ゟ首を出し自然と梟首ゑ見せるハ請升たト、血まぶれゑ成處すごい〳〵

○市十郎鳶の者ハ東京染ない人故ゑまらぬハ尤シカシ半天の尻ゑしよりハ堂云了簡ゥ

○家橘の手子舞ハ若旦那ゞ祭ゑ付て鳶の者ゑ成た樣でした

○小團次の鳶の者ハ大出來〳〵鬘の好みもよく彫物も宜五座り升た振事も甘い〳〵

○霍助の手子舞ハ鬘の好もわしく振事も鳶の者ゑしてハ和らの過て惡し

團右衛門鶴助の鳶の者ハ土方から仕上たゥと見得升た

○小紫の鉄棒引ハきれい〳〵と云迄の事

○扨五人男ハ久し振の顔揃ゑて宜心持ゑ五さり升た半四郎病氣の節ハ並び方ハ眞先が團十郎宗十郎仲藏左團次翫五郎ゑて仲藏ハ不忍弁藏と仕升た

○投書家人名

△琴通舎　井蛙子　飯田町中村　日本橋　十全堂好　大　並見小僧　ヘタ助　加藤覗　興登丸　荒井美羊　鈍久里　岡目八毛久

○引讀來春狂言評判記發兌仕ゟ問陸續投書あらん事乞願

明治十二年十一月十三日
出版御届濟
日本橋區堀江町二丁目二番地平民
編輯兼出版人　植木林之助
京橋區出雲町四番地
印刷　假名讀新聞社

ト此つらねすんで先今日ハ是きりト目出度打出し

○中村仲藏万助ハさしたる仕様もなけれバ評する迄の事なし上るり祭の世話役もさしたる事無し半四郎宗十郎病氣の節五人男の代りハ五苦勞〳〵

○澤村百之助娘ふひなハさしたるお役でもなけれバ評なし鉄棒引ハきれい〳〵

○尾上菊五郎大月ハ此處ゑまり役ゑて大出來〳〵チョボゑゑまつてのうまい苦へ升た半の穴ゑ首を出し自然と梟首ゑ見ゆるハ請升たト、血まぶれゑ成處すごい〳〵

○市十郎鳶の者ハ東京染ない人故ゑまらぬハ尤シカシ半天の尻ゑしよりハ堂云了簡ゥ

○家橘の手子舞ハ若旦那ゲ祭ゑ付て鳶の者ゑ成た樣でした

○小團次の鳶の者ハ大出來〳〵髷の好みもよく彫物も宜五座り升た振事も甘い〳〵

○霍助の手子舞ハ髷の好もわしく振事も鳶の者ゑしてハ和らの過て悪し

團右衛門鶴助の鳶の者ハ土方から仕上たゥと見得升た

○小紫の鉄棒引ハきれい〳〵と云迄の事

○扨五人男ハ久し振の顔揃ゑて宜心持ゑ五さり升た半四郎病氣の節ハ並び方ハ眞先が團十郎宗十郎仲藏左團次菊五郎ゑて仲藏ハ不忍弁藏と仕升た

○投書家人名

△琴通舎　立見小僧　加藤覗　百文字屋
井蛙子　ヘタ助　奥登丸　荒井美羊
飯田町中村　十全堂　鈍久里　岡目八毛久
日本橋　大好

○引讀來春狂言評判記發兌仕ル問陸續投書ゆらん事乞願

明治十二年十一月十三日
出版御届濟
日本橋區堀江町二丁目
二番地平民
編輯兼出版人　植木林之助
京橋區出雲町四番地
印刷　假名讀新聞社

假給武錢